

# 児童期の母親の養育態度としつけ方略が 自己制御機能の発達に与える影響

森 下 正 康  
(児童学科)

前 田 百 合 香  
(児童学科10期生)

本研究の目的は、児童期における母親の受容的な養育態度は、自己抑制や自己主張を誘導する言葉かけ（誘導方略）を促進し、そのような態度と言葉かけが共に子どもの自己抑制や自己主張を促進する、という仮説を中心に検討することであった。女子大学生314名を対象とし、児童期の母親の養育態度と母親の誘導方略、現在の自己制御機能について質問紙調査を行った。因子分析の結果、母親の養育態度については「受容」「統制」「甘やかし」「友達重視」の4因子、母親の誘導方略については「自己抑制の誘導」「自己表現の誘導」「励まし」の3因子、自己制御については「自己主張」「根気我慢」「情動抑制」の3因子が得られた。各因子に対応する尺度について $\alpha$ 係数を算出して信頼性を確認した。養育態度と誘導方略を説明変数として自己制御に関するパス解析を行った結果、児童期における母親の「受容」的態度は、子どもの「根気我慢」と「情動抑制」を直接高めると共に、「励まし」の言葉かけを増加させそれを介して「根気我慢」と「情動抑制」を高めていた。このような結果は基本的に仮説を支持していた。分散分析の結果、特に「受容」的態度得点が高く「励まし」の言葉かけが多い群の「根気我慢」得点が高いことが明らかとなった。また、「受容」的態度あるいは「励まし」の言葉かけが多い場合、「自己表現の誘導」は子どもの「自己主張」を促進する効果を持つが、それらが少ない場合は、「自己表現の誘導」はむしろ「自己主張」を低下させるということが示唆された。つまり、子どもに対する誘導的な言葉かけの影響は、母親の養育態度の特徴によって異なるということが示唆された。

キーワード：自己制御，自己抑制，自己主張，言葉かけ，養育態度，しつけ方略

## 問 題

自己制御（self regulation）は二つの機能から成っていると考えられている。柏木（1986）によれば、それは自分の欲求や意志を明確にもって主張し、他者や集団のなかで協調的に表現する自己主張（self assertion）的側面と、社会的場面において自分の欲求や行動を抑制・制止しなければならないときにそれができる自己抑制（self control）的側面である。この二つの側面がバランスよく発揮することが社会への適応と深く関係すると考えられている（柏木，1986；森下，2003；丸山，2009）。

自己主張は、自己表現力といいかえてもいい

ものであり、その中には、大きく二つの特徴がふくまれている。ひとつは正しいと思うことは人の前で話すことができ、いやだと思うことは拒否できるという「正当な主張・拒否」という特徴であり、もう一つは、自らすすんでものごとに取り組む「積極性・自律性」という特徴である（森下，2000）。2000年前後から、日本において自己主張すべき状況で自己主張できない子どもや青年が多いことから、自己主張の問題が注目されるようになったといわれている（丸山，2009）。ただし、それ以前から自己制御における自己主張の機能の重要性は指摘されている（柏木，1986）。東・柏木・ヘス（1981）や

柏木（1988）は、日本文化の特徴として、母親の発達期待や社会規範が自己主張面よりも自己抑制面の方を重視する傾向があるとしている。このことが日本の子どもの幼少期からの順調な自己抑制の発達を促している半面、自己主張の発達を遅らせていると示唆している。

本研究において、子どもの自己制御機能がどのように発達するのかというテーマに焦点を当てた。これまで幼児期について、母親と父親の養育態度が子どもの自己制御にどのような影響を与えるかについて検討したところ、母親と同じように父親の影響も大きいということ（森下、2001；森下、2003）、さらに、母親と父親の養育態度の組み合わせパターンによってその影響が異なることが示された。また、自己主張や自己抑制について、親をモデルとして親へのモデリングが生じている可能性も示唆されている（森下、2001；森下、1996）。

本研究では、親子関係、特に母親の養育態度と言葉かけに代表されるしつけ方略（discipline strategy）が子どもの自己制御機能に与える影響に課題を絞った。子どもが自分の言語で行動統制の役割をとりはじめるのは、他者からの言葉かけのままに行動する時期より少し後になるとされている（柏木、1983）。無藤・麻生（2004）は、4、5歳頃から他者から言われた言葉を自分に取り込んで、自分自身の行動を制御するために用いるようになるという。幼児・児童期、家庭において教育やしつけを行うために「言葉かけ」が用いられており、言葉かけを通じて何をどうしたらよいかを具体的な形で子どもに伝ようとしている（森下・藤村、2013）。柏木（1988）は、相対的に従順であることを期待する日本の母親の中で、逆に自己主張ができることを子どもに強く期待するタイプの母親の子どもでは、自己主張が育っていることを示唆している。

しかし、親からの言葉かけに関する研究は少なく、さらにそれが子どもにどのような影響を与えるかについての研究はきわめて少ない。そこで、森下・松山（2014）は、中学・高校時代の日常生活場面における母親から子どもへの言

言葉かけについて、5つの因子から成る新しい尺度を作成した。その言葉かけが女子大学生の母子関係に対する影響について検討したところ、中学・高校時代の「寄り添い」と「受容支持」因子からなる母親からの『受容的』な言葉かけは、母親への「信頼尊敬」を高め、「親への反発」を低下させていた。それに対して、「拒否否定」と「突き放し」因子からなる『拒否的な言葉かけ』はその反対の結果を示していた。

森下・藤村（2013）の研究では、養育者との信頼関係のもとで幼い頃からの自己制御を奨励し促進するような言葉かけが多いほど、子どもは最後まで「頑張る力」がより高まるということが示唆された。その研究では自己制御を奨励し促進するような言葉かけに焦点を当てていた。しかし、そのような直接的な表現ではなく子どもの気持ちや自我に訴えかける言葉かけ、特に説明を与えながら子どもに考えさせる説明的・誘導的なしつけ方略（誘導方略：inductive discipline strategies; Hoffman, 1963, 1970, 1975）の効果が大きいのではないかと考えた。森下（2000）の研究では、母親の自己抑制や自己主張への誘導方略は、幼稚園の年中女子に対して自己抑制と自己主張の両方を高める可能性を示唆していた。

このような誘導方略は、日本の文化的特徴と考えられており、子どもの気持ちや自我に訴えるというしつけスタイルの反映である（小嶋、1986、1987；東、1994）。この誘導方略が、子どもの自己主張や自己抑制を発達させると予想される。その誘導方略の根底には子どもを信頼し受容する態度が想定される。このように、子どもの自己抑制や自己主張が発達するためには、親からの誘導的な態度や言葉かけと共に親から受容され肯定されることが重要であろう。

仮説1：児童期における母親の受容的な養育態度は、自己抑制や自己主張を誘導する言葉かけを促進し、そのような態度と言葉かけが共に子どもの自己抑制や自己主張を促進する。

すでに述べたように、誘導的なしつけや言葉かけに関する研究そのものが限られている（末田・庄司・森下、1985；森下・藤村、2013）。

さらに、母親の誘導方略が、子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかに関する研究は極めて少ない。そのような中で、偏食に対する誘導的言葉かけ尺度の作成を試みたが、その意図を反映するような尺度の作成がなかなか難しいということが分かった（森下・藤田、2012a）。そこで、自己制御に関して誘導方略の新しい尺度を作成することから研究を始める必要がある。

自己制御機能の発達には、親以外の人との相互作用の経験も重要である。そのような豊かな相互作用の経験の場として、まず仲間との触れ合いの場が想定される。母親が子どもと友達との遊びの場を積極的に設けるなどの友達重視の態度が、子どもの自己主張と自己抑制を高めるのではないかと考える。

別の視点から、柏木（1988）は、母親の介入・過保護が子どもの自己抑制や自己主張の発達にマイナスの影響を与えると指摘している。ここでは介入・過保護は子どもが自ら体験する経験の場を限定してしまうからだとされている。森下（2000）の研究結果では、幼稚園の年長児に関して、自己抑制が低い子どもには母親の統制的態度が強いという特徴があった。親からの命令や押しつけが多い統制的態度は、過保護と同じように子どもの自主的な行動や経験を過度に制限してしまう。また、統制的な態度は、子どもに我慢させることが多いことから、かえって子どもの自己抑制を低下させ、子どもの反発や自己主張を招く可能性がある。他方、子どもは親の統制をそのまま受け止めて、自己抑制を高め自己主張を低下させる可能性もある（Hoffman, 1970）。

子どもの要求を何でも聞いてあげるような甘やかしの態度は、子どもの自己抑制を経験する機会を減少させ子どもの自己抑制を低下させ、自己主張を高めることが予想される。甘やかしは上記の統制と正反対の養育態度・行動のようにみえるが、子どもの自己制御にはマイナスの影響を与える可能性がある。

以上のことから、仮説2として、友達重視の態度は子どもの自己抑制と自己主張を高め、甘

やかしの態度は自己抑制を低下させ、自己主張を高めると予想される。しかし、統制的態度の影響は予測しがたい。

## 方法

- (1) 調査対象 女子大学の学生329名を対象に質問紙への評定を求めた。その中から記入漏れのない314名のデータを分析の対象とした。ただし、そのうち、15名は1項目の記入漏れがあったが、評定の中間の得点を入力して分析の対象とした。対象者の内訳は、児童学科の学生195名（1回生80、2回生108、4回生7）、食物栄養学科の学生119名（1回生）であった。
- (2) 調査期間 平成25年7月中旬
- (3) 手続き 1・2回生には、それぞれの授業中に質問紙を配布し、児童期の母親の養育態度、児童期の母親の誘導方略、現在の自分の自己制御機能について無記名で回答してもらい、その場で回収した。4回生には、同様の質問紙を配布し、後日回収した。
- (4) 使用した尺度・項目

### ①児童期の母親の養育態度

児童期の母親の養育態度について、受容、統制、甘やかし、友達重視に関する内容を測定するために、鈴木・松田・永田・植村（1935）の研究から6項目、辻岡・山本（1975）の尺度から9項目、新しく作成した16項目、計31項目からなる尺度を作成した（表2参照）。児童期の母親または、母親に代わる人の養育態度について回想してもらい、4段階評定（「あてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」）を求めた。

### ②児童期の母親の誘導方略

説明的・誘導的な言葉かけ、特に子どもの気持ちや自我に訴えて自ら選択し行動するするような言葉かけ（誘導方略）に焦点を当てた。そこで、児童期の母親の誘導方略について、はじめに発達心理学専攻の学生7名を対象に予備調査を行った。児童期に自己主張や自己抑制が必要であろう場面を設定し、養育者から受けた誘導的な言葉かけについてどのようなものがあつたか、またどのようなものが考えられるか自由

記述を求めた。そこで得られた回答を参考にして、6場面(19項目)から成る新しい質問紙を作成した(表1)。小学生のころの母親または母親に代わる人について回想してもらい、各項目について「まったく言われなかった」「あまり言われなかった」「ときどき言われた」「よく言われた」の4段階評定を求めた。

表1 母親の誘導方略の項目

1	『自分の思ったことや意見を言いたい時』
(1)	自分は自分だから、人と同じでなくてもいいのよ
(2)	頑張ってることを言ってみたらどうかな
(3)	あなたの気持ちが知りたいな
2	『嫌なことをされた時』
(1)	あなたが嫌だと思っていること、友達は気がついていないかもしれないから、嫌と言ってみたら
(2)	嫌なときは「嫌」って言えばすっきりするのよ
3	『仲間に加わりたい時』
(1)	自分から声をかけることができれば、きっと楽しいだろうな
(2)	「入れて」って言ってみたら
4	『決まりやルールを守らなければならない時』
(1)	決まりやルールを守らないと、いろんな人に迷惑をかけてしまうね
(2)	みんなが決まりやルールを守ると、気持ちよく過ごすことができるのよ
(3)	このルールを守らなかったらどうなるかな
5	『自分の思い通りにいかない時』
(1)	楽しみにしていたのにごめんね。今日は行けなかったけど○日に行こうね
(2)	もし、みんなが自分のしたようにしたらどうなるかな
(3)	あなたがそうしたらみんなどう思うかな
(4)	あなたは賢いだから、どうすればいいかわかるよね
6	『失敗したりうまくいかなかった時』
(1)	頑張ったから、だんだん上手くなったね
(2)	あなたには無理よ
(3)	今、頑張ったら、きっとできるはずよ
(4)	あきらめが肝心よ。
(5)	あきらめずに頑張ることが大切なのよ

### ③女子大学生の自己制御機能

女子大学生の自己制御機能について、柏木(1988)から9項目、原田・古澤・吉田(2008)から15項目、森下・藤村(2013)から6項目を参考にして、学生用に表現を修正して尺度を作成した(表3参照)。各項目について、現在の自分について「あてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4段階評定を求めた。

## 結果

### 1. 尺度項目の因子分析

それぞれの尺度項目について因子分析を行った。まず主成分分析を行い、固有値の変動(スクリープロット)と説明された分散の値を参考にして因子数を決定した。次に最尤法による因子分析を行い、最終的にプロマックス回転を行った。各因子に高く負荷する項目の評定得点の和を尺度得点とし、各尺度の $\alpha$ 係数を算出した。

#### (1) 児童期の母親の養育態度

因子分析の結果、どの因子にも負荷量が低かった1項目を削除し、再度因子分析を行い、最終的に4因子を得た。各因子に高く負荷する項目内容から、第1因子を「受容」、第2因子を「統制」、第3因子を「甘やかし」、第4因子を「友達重視」と命名した。内容的妥当性について疑問のある4項目は外し、負荷量の高い項目を用いて尺度を構成した(表2)。各尺度について $\alpha$ 係数を算出したところ、第1、第2因子に関する尺度の $\alpha$ 係数は比較的高かった。しかし、第3、第4因子に関する尺度の $\alpha$ 係数は必ずしも高い値とはいえなかったが、一応今後の分析に使用した(表2)。

#### (2) 児童期の母親の誘導方略

因子分析の結果4因子が得られ、各因子に高く負荷する項目内容から、第1因子を「自己抑制の誘導」、第2因子を「自己表現の誘導」、第3因子を「励まし」、第4因子を「突き放し」因子と命名した。内容的妥当性について疑問のある項目(第1因子2項目)は外し、負荷量の高い項目を用いて尺度を構成した(表3)。項目内容が示すように、「自己抑制の誘導」「自己表現の誘導」「励まし」因子は、それぞれ子どもに対する押し付けでなくて、子どもの気持ちや自我に訴えて、子ども自らが自己抑制や自己主張、それに頑張ろうという気持ちを引き出そうとしている。この3因子に関する尺度について $\alpha$ 係数を求めたところ、高い信頼性が得られた(表3)。しかし、第4因子は $\alpha$ 係数(.619)が比較的低く研究目的から外れる因子であったので、以下の分析では使用しなかった。

表2 母親の養育態度の因子と項目 ( $\alpha$ 係数)

第1因子【受容】(.918)
1 心配事をじっくり聞いてくれるので気持ちが楽になった。
2 私のなやみや心配ごとを理解してくれた。
3 私が困っているときには元気づけてくれた。
4 話したいことがある時は、話を聞く時間を十分に作ってくれた。
5 一緒にいると気持ちが楽になった。
6 私の言うことに耳を傾けてくれた。
7 聞いたことに対してきちんと答えてくれた。
8 私がどんな物の見方をしているのか理解しようとした。
9 悪いことをした時は叱るだけではなく、なぜそんなことをしたのか理由を聞かれた。
10 私にたびたび話しかけた。
11 お願い事がある時、なぜそうしたいのか理由を聞かれた。
12 私と一緒に、外出や旅行をするのが好きだった。
第2因子【統制】(.709)
13 私が長い時間、外で過ごすことを認めなかった。
14 私に何かあるといけないから、あまりよそへ行かさないようにした。
15 友達と遊んでばかりいないで勉強しなさいと言われた。
16 私が何をすべきかいつも私に指図しがった。
17 私が家の手伝いをしないと腹を立てた。
18 友達とのケンカにすぐ口を出してきた。
19 少しでも悪いことをしたら怒られた。
第3因子【甘やかし】(.566)
20 私が欲しがった物はなんでも買ってくれた。
21 なんでも私がしたいようにさせてくれた。
22 だだをこねたら私の意見が通ることが多かった。
23 自分のことは自分でやるように言われた。*
第4因子【友達重視】(.679)
24 私の誕生日会やお泊り会などをよくおこなってくれた。
25 子ども会やクラブ活動などに積極的に一緒に参加してくれた。
26 自宅に友達を呼んで遊ぶことを歓迎してくれた。

\*印は逆転項目

表3 母親の誘導方略の因子と項目 ( $\alpha$ 係数)

第1因子【自己抑制の誘導】(.837)
5(2) もし、みんなが自分のしたようにしたらどうなるかな。
5(3) あなたがそうしたらみんなどう思うかな。
4(3) このルールを守らなかったらどうなるかな。
4(2) みんなが決まりやルールを守ると、気持ちよく過ごすことができるのよ。
4(1) 決まりやルールを守らないと、いろんな人に迷惑をかけてしまうね。
5(4) あなたは賢いだから、どうすればいいかわかるよね。
第2因子【自己表現の誘導】(.796)
2(1) あなたが嫌だと思っていること、友達は気がついてないかもしれないから、嫌と言ってみたら。
2(2) 嫌なときは「嫌」って言えばすっきりするのよ。
1(2) 頑張ったことを言ってみたらどうかな。
1(1) 自分は自分だから人と同じでなくてもいいのよ。
1(3) あなたの気持ちが知りたいな。
第3因子【励まし】(.766)
6(3) 今、頑張ったら、きっとできるはずよ。
6(1) 頑張ったから、だんだん上手くなったね。
6(5) あきらめずに頑張ることが大切なのよ。
5(1) 楽しみにしていたのにごめんね。今日は行けなかったけど○日に行こうね。

表4 自己制御の因子と項目 ( $\alpha$ 係数)

第1因子【自己主張】(.877)
1 周囲と違っていても自分なりの考えをはっきり述べる。
2 他の子と自分の意見が違っていると臆せず主張できる。
3 多数派の意見とは違って自分の意見を言う。
4 友達の考えに流されることなく、自分の考えを言うことができる。
5 嫌なことは、はっきりいやといえる。
6 自分の思ったことをなかなか口口にだして言えない。*
7 たと言いにくても間違っていることは指摘できる。
8 話し合いの場で(たずねられなくても)進んで自分の意見を述べる。
9 自分が並んでいる前に誰かが入り込んできたら、相手に注意できる。
10 仕事・課題や遊びなど、周囲の人にいちいち聞かずに、自分のアイデアを進めることができる。
11 友達が嫌がらせや悪ふざけなどをしている時でも、よくないと伝えることができない。*
第2因子【根気我慢】(.795)
12 やりたくないことでもやらないといけないときはやる。
13 周りから決められた役割が困難なことでも、すぐにあきらめたりせずに、我慢してやりとす。
14 集団の中で、自分の決められた役割がある時は、どんな誘惑にも負けずに取り組む。
15 皆でやるべき課題がある時は、遊びたい衝動に駆られても我慢できる。
16 相談や大勢で話している時自分の順番を待てる。
17 きまりやルールを守る(ズルやごまかしをしない)
18 欲しい物がすぐ手に入らなくても我慢できる。
19 相手の話を最後までしっかり聞く。
20 時間がかかっても最後まで頑張る。
第3因子【情動抑制】(.645)
21 嫌なことがあっても、人や物に八つ当たりしない。
22 悲しい、くやしいこと、つらいことなどの感情を露骨に表したりしない。
23 納得のいかないことがあった時、すぐにかんしゃくをしたりせず、落ち着いて話すことができる。
24 友達から間違いを指摘されたら、素直に自分が間違ったことを認める。

\*印は逆転項目

(3) 女子大生学の自己制御機能

因子分析の結果5因子が得られたが、どの因子にも負荷量が低かった1項目を削除し、再度因子分析を行った。各因子に高く負荷する項目内容から、第1因子を「自己主張」、第2因子を「根気我慢」、第3因子を「情動抑制」、第4因子を「否定的情動表出」と命名した(表4)。第5因子は1項目からなる特殊因子であった。 $\alpha$ 係数をもとめたところ、第1因子、第2因子に関する尺度については高い値が得られたが、第3因子に関する尺度については必ずしも高い値とはいえなかったが、今後の分析に用いた。第4因子に関する尺度については $\alpha$ 係数が0.585と低かったため、第5因子と共に、以下の分析では用いなかった。

2. 尺度間の相関とパス解析

児童期の母親の養育態度、児童期の母親の誘導方略、女子大学生の自己制御機能が相互にどのような関連あるかを明らかにするため、まず尺度間の相関係数をもとめた。表5に示すように、養育態度間について、「受容」と「友達重視」尺度間には中程度の相関がみられたが、それ以外の尺度間の相関は低かった。誘導方略について、「自己抑制の誘導」「自己主張の誘導」「励まし」の3尺度間には比較的高い正の相関がみられた。つまり、誘導的な言葉かけや励ましの言葉かけが全般に多い人とそうでない人に分けることができるだろう。自己制御については、「根気我慢」は「情動抑制」との間に正の相関があり、また「自己主張」との間にも低い

が正の相関がみられた。しかし「自己主張」と「情動抑制」との間には相関がなかった。

続いて、仮説に沿って Amos によりパス解析を行った（小塩，2008；豊田秀樹，2007）。パスモデルの作成に際して、母親の誘導方略である「自己抑制の誘導」「自己表現の誘導」「励まし」に対して、母親の「受容」「統制」「甘やかし」「友達重視」の4つの養育態度の要因以外に、共通に影響する要因があると想定して、その誤差間に双方向のパスを入れた。また、同じような理由から「自己主張」「根気我慢」「情動抑制」の誤差間にも双方向のパスを入れた。仮説に沿ってパスモデルを作成しパス係数の有意ではないものからパスを一つずつ減らしていった。その結果、最終的に適合性の高いパス

表5 尺度間の相関

	受容	統制	甘やかし	友達重視	自己抑制	自己表現	励まし	自己主張	根気我慢	情動抑制
受容	—	-.168**	.213**	.443**	.409**	.481**	.575**	.032	.350**	.255**
統制	-.168**	—	-.115	.037	.126*	.039	-.045	.058	-.064	-.028
甘やかし	.213**	-.115*	—	.213**	.006	.015	.127*	-.041	-.009	-.073
友達重視	.443**	.037	.213**	—	.285**	.178**	.377**	.083	.080	.122*
自己抑制の誘導	.409**	.126	.006	.285**	—	.505**	.574**	-.012	.148**	.229**
自己表現の誘導	.481**	.039	.015	.178**	.505**	—	.495**	.012	.173**	.168**
励まし	.575**	-.045	.127*	.377**	.574**	.495**	—	.005	.329**	.276**
自己主張	.032	.058	-.041	.083	-.012	.012	.005	—	.138*	-.017
根気我慢	.350**	-.064	-.009	.080	.148**	.173**	.329**	.138*	—	.413**
情動抑制	.255**	-.028	-.073	.122*	.229**	.168**	.276**	-.017	.413**	—

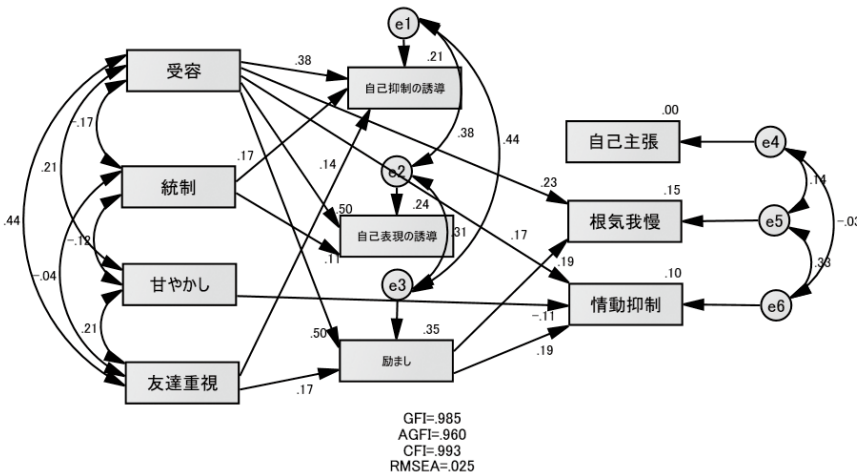


図1 母親の養育態度—誘導方略—自己制御機能のパスモデル

モデルが得られた(図1)。図のなかのパス係数はすべて5%レベルで有意であった。

パス解析の結果、「根気我慢」に関しては、母親の「受容」的態度が、直接「根気我慢」を高めると共に「励まし」の言葉かけを高め、それを介して「根気我慢」を高めていた。さらに、「友達重視」は「励まし」の言葉かけを高め、それを介して「根気我慢」を高めていた。「情動抑制」に関しては、「受容」的態度が「情動抑制」を直接高めると共に、「励ましの」言葉かけを介しても「情動抑制」を高めていた。それに対して、「甘やかし」態度は「情動抑制」を直接低下させていた。「自己主張」に関しては有意なパスはみられなかった。

以上の結果について、4つの養育態度を説明変数とした文脈の中で、養育態度に焦点を当てると次の点が明らかとなった。

①児童期の母親の「受容」的態度は母親の「自己抑制の誘導」「自己表現の誘導」「励まし」の誘導方略のすべてを高めていた。また、母親の「受容」的態度は子どもの「根気我慢」と「情動抑制」を直接高めると共に、「励まし」の言葉かけを介して「根気我慢」と「情動抑制」を高めていた。

②母親の「統制」的態度は「自己抑制の誘導」と「自己表現の誘導」を高めていた。

③母親の「甘やかし」態度は、子どもの「情動抑制」を直接低下させていた。

④母親の「友達重視」は、「自己抑制の誘導」と「励まし」の言葉かけを高めていた。さらに、母親の「友達重視」は、「励まし」を介して子どもの「根気我慢」と「情動抑制」を高めていた。

以上の中で、特に強いパスは、「受容」から「自己抑制の誘導」「自己表現の誘導」「励まし」へのパスであった。児童期の母親の養育態度が母親の言葉かけに及ぼす影響の説明率は21%から35%であった。児童期の母親の養育態度や言葉かけが子どもの自己制御に及ぼす影響の説明率は、「根気我慢」については15%、「情動抑制」については10%であった。「自己主張」については、有意なパスはみられなかった。

### 3. 養育態度と誘導方略の交互作用

パス解析では直線回帰を想定しているため、説明変数間に交互作用がある場合、必ずしも有意なパスを示さないことがある。そこで、養育態度の2尺度、誘導方略の3尺を組み合わせて2要因の分散分析を行った。その際、独立変数に当たる尺度について、それぞれの中央値をもとに上位(H)群と下位(L)群に分けた。分散分析の結果、次のような交互作用がみられた。

①「自己主張」について、母親の養育態度の「受容」要因と誘導方略の「自己表現の誘導」要因の交互作用が有意であった( $F(1,310) = 5.368, p < .05$ )。そこで、Bonferroniの方法(石村, 2006)によってその後の検定を行ったところ、自己表現の誘導H群では受容L群の方がH群よりも自己主張得点が有意に低く、さらに、受容L群では自己表現の誘導H群の方がL群よりも自己主張得点が有意に低かった(図2)。つまり、図からわかるように、母親の受容が低くかつ母親からの自己表現の誘導の言葉かけが多い場合、子どもの自己主張が低いということが明らかとなった。

②同じく「自己主張」について、「自己表現の誘導」要因と「励まし」要因の交互作用が有意であった( $F(1,310) = 5.679, p < .05$ )。その後の検定を行った結果、励ましL群では自己表現の誘導L群の方がH群よりも自己主張が有意に高く、自己表現の誘導H群では、励ましH群の方がL群よりも自己主張得点が有意に高かった(図3)。つまり、母親から自己表現の誘導の言葉かけが多い場合、励ましの言葉かけも多ければ子どもの自己主張が高く、励ましの言葉かけが少なければ子どもの自己主張が著しく低いということが明らかとなった。

③「根気我慢」に関して、養育態度の「受容」要因と誘導方略の「励まし要因」の交互作用が有意であった( $F(1,310) = 5.265, p < .05$ )。その後の検定を行った結果、励ましH群でもL群でも受容H群の方がL群よりも根気我慢得点が有意に高かった。さらに、受容H群では、励ましH群の方がL群よりも根気我慢得点が有意に高かった。(図4)。つまり、母親の受容が高

い子どもの根気我慢は高いということと、特に受容が高く励ましの言葉かけが多い子どもの根気我慢は著しく高いということが分かった。

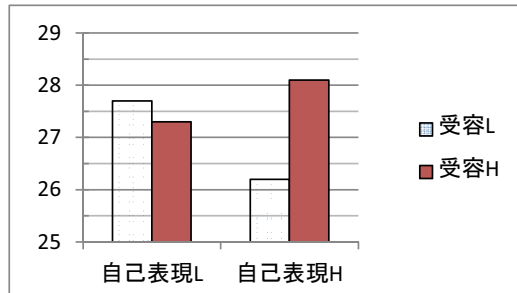


図2 受容・自己表現の誘導と自己主張

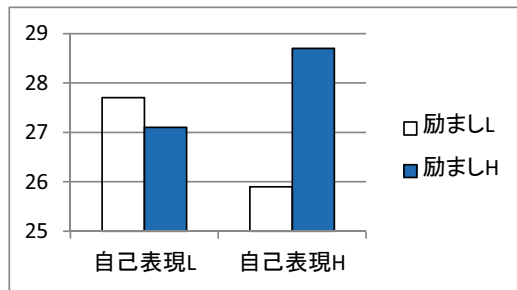


図3 励まし・自己表現の誘導と自己主張

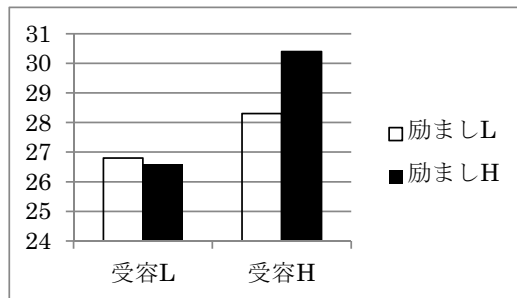


図4 受容・励ましと根気我慢

### 考察

本研究の目的は、児童期の母親の養育態度と言葉かけによる誘導方略が、子どもの自己制御機能にどのような影響を与えるかを明らかにすることであった。

#### 1. 自己制御機能の因子について

本研究では「自己主張」「根気我慢」「情動抑制」の3つの因子が得られた。「自己主張」因

子は柏木（1986）の自己主張的側面に、「根気我慢」「情動抑制」は柏木の自己抑制的側面に対応するだろう。しかし、「根気我慢」の因子は、他の二つの因子と正の相関を示し、抑制的な機能だけではなく自己主張的な側面をも含み、自己制御機能の重要な特性であると考え（森下・藤村，2013）。「情動抑制」因子は、豊田弘志ほか（2005，2011）の情動知能を構成する「情動の制御と調節」因子と名称が類似している。しかし、その内容は異なり、彼らの因子は単にネガティブな情動を抑制するというよりは、むしろポジティブな情動を維持しつつより頑張ろうとする意欲を含んでおり、「根気我慢」を支えるような重要な新しい視点である。

#### 2. 養育態度と言葉かけ

パス解析の結果から、母親の「受容」的態度は誘導方略の「自己抑制の誘導」「自己表現の誘導」「励まし」3因子をそれぞれを高め、「統制」的態度は「自己抑制の誘導」と「自己表現の誘導」を高め、「友達重視」は「自己抑制の誘導」と「励まし」を高めていた。したがって、母親の養育態度は「甘やかし」以外は母親の誘導方略に影響していることが明らかとなった。言い換えると、母親の言葉かけの背景には、養育態度があるということが分かった。先の研究（森下・藤田，2012b）において、食卓における母親の言葉かけの背景に母親の養育態度があるのではないかと指摘したが、そのことがここに確認されたといえるだろう。

#### 3. 根気我慢と情動抑制について

パス解析の結果、児童期の母親の「受容」的態度は子どもの「根気我慢」と「情動抑制」を直接高めると共に、「励まし」の言葉かけを介しても子どもの「根気我慢」と「情動抑制」を高めていた。「根気我慢」や「情動抑制」に対して母親の「受容」は、直接的、間接的な効果の両方をもち総合効果を高めていた。また、分散分析の結果が示すように、母親が受容的な場合に、母親からの「励まし」の言葉かけがよりいっそう「根気我慢」を高めるということが明らかとなった。したがって、仮説1は部分的に支持されたといえる。これらの結果は、森下・



藤村（2013）の結果と一致している。

しかし、言葉かけのなかで「励まし」以外の「自己抑制の誘導」と「自己表現の誘導」の言葉かけは、それ自身「根気我慢」や「情動抑制」に対しては影響しないという結果であった。この点についての吟味は今後必要である。

#### 4. 自己主張について

パス解析の結果は、母親の養育態度や母親からの言葉かけから、「自己主張」に対して有意なパスはみられなかった。しかし、分散分析を行ったところ交互作用がみられ、母親から「自己表現の誘導」の言葉かけが多い場合、母親の「受容」あるいは「励まし」の言葉かけが多ければ子どもの自己主張が高くなるということ、母親の「受容」や「励まし」の言葉かけが少なければ子どもの自己主張が著しく低くなるということが明らかとなった。図2と図3に示されるように、母親の受容と励ましの言葉かけの効果は同じようなパターンを示していた。つまり、自己主張に対する自己表現の言葉かけの効果は、母親の受容的態度や励ましの言葉かけがあつてこそみられ、それが無い場合には逆効果をもたらすということが示唆された。パス解析の結果にはこのような要因間の交互作用が反映されなかったといえる。この結果は、言葉かけがどのような態度から発せられるかが重要だということを示している。自己主張を誘導する言葉かけも、受容的でない母親から発せられると、子どもはむしろ批判や非難として受け止め、より自己主張を低下させる可能性がある。受容的態度から励ましの言葉かけには強いパスが行っており、励ましの言葉かけの背景に受容的態度があることを示していた。したがって、両者は子どもに対して同じような機能を持っていると考えることができる。

#### 5. 統制、甘やかし、友達重視の影響

パス解析においても分散分析においても、母親の「統制」的態度は、自己抑制や自己主張に対して直接的にも間接的にも影響していないということが明らかになった。この点については今後の検討が必要な課題である。

母親の「甘やかし」は、子どもの「情動抑

制」を直接低下させていた。この点は仮説2と一致していた。欲求がいつでもかなえられるという状況は、情動を抑制する力を育てないということができようだろう。しかし、「甘やかし」は、自己主張には影響していなかった。

母親の「友達重視」は子どもの「励まし」の言葉かけを介して「根気我慢」や「情動抑制」を高めていた。「友達重視」は「受容」的態度と正の相関があり、上記のような結果から、両者は同じような機能を持っていると考えられる。

#### 6. 今後の課題

本研究においては、女子大学生に小学生の頃の母親の養育態度や言葉かけについて思い出してもらった。つまり、回答者自身が現時点において、小学生の頃の母親の態度や言葉かけをどのように受け止めているかという子どもの視点からの研究であった。したがって、児童期の実際の母親の態度や言葉かけを正確に反映しているという保証はない。今後、可能であれば、子どもの母親自身に小学生時代の養育態度や言葉かけを評定してもらい、比較検討する必要があるだろう。しかしそうしたところで、その結果が小学生時代の実際の姿を反映しているかどうかは疑問が残り、本格的には縦断的な研究が必要となるだろう。どのような時期に、どのようなメカニズムで自己制御機能が発達するかを明らかにするためにも、縦断的な研究が必要である。しかし、それは実現するためにはたいへん困難な課題である。

本研究で使用した尺度のなかで、特に誘導方略に関するものは、自己抑制や自己主張を促進するような言葉かけに焦点を当て、従来の尺度を参照しつつ新しく作成した尺度であった。したがって、今後より信頼性と妥当性の高い尺度にしていく必要がある。

本研究では、主として母親の養育態度や誘導方略と女子大学生の自己制御機能に焦点を当てたが、当然のことながら父親の養育態度や誘導方略からの影響や、男子大学生を対象とした研究も残されている。

本研究では、児童期の母親の養育態度や言葉かけが子どもの自己制御機能にどのように影響

するかを検討したが、必ずしも自己制御機能の説明率はあまり高いものではなかった。したがって、自己制御機能の発達に強い影響を与える他の要因をも探る必要があるだろう。

### 引用文献

- 東 洋 (1994). 日本人のしつけと教育 東京大学出版会.
- 東 洋 (柏木恵子編) (1989). 教育の心理学 有斐閣.
- 東 洋・柏木恵子・R. D. ヘス (1981). 母親の態度行動と子どもの知的発達一日米比較研究 東京大学出版会.
- 原田知佳・古澤寛之・吉田俊和 (2011). 社会的自己制御尺度 堀洋道監修/松井豊・宮本聡介編 心理測定尺度集VI pp. 176-182. サイエンス社.
- Hoffman, M. L. (1963). Parent discipline and the child's consideration for others. *Child Development*, **34**, 573-588.
- Hoffman, M. L. (1970). 'Moral development'. In: P. H. Mussen (ed.), *Carmichael's Manual of Child Psychology*, Volume 2. New York: Wiley, pp. 261-360.
- Hoffman, M. L. (1975). Altruistic behavior and the parent-child relationship, *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, pp. 937-943.
- 石村貞夫 (2006). SPSSによる分散分析と多重比較の手順 (第3版) 東京図書.
- 柏木恵子 (1983). 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会.
- 柏木恵子 (1986). 自己制御の発達 心理学評論, **29**, 3-24.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に— 東京大学出版会.
- 小嶋秀夫 (1986a). 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(1) 名古屋大学教育学部紀要—教育学科, **33**, 1-24.
- 小嶋秀夫 (1986b). 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(2) 名古屋大学教育学部紀要—教育学科, **34**, 189-217.
- 小塩真司 (2008). 初めての共分散構造分析: Amosによるパス解析 東京書籍.
- 丸山 (山本) 愛子 (2009). 自己調整能力の発達に関する大学生の自己認知—幼児期から青年期後期までの自己主張・自己抑制的行動の自己評定から— 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部, **58**, 73-80.
- 森下正康 (1996). 子どもの社会的行動の形成に関する研究 風間書房.
- 森下正康 (2000). 幼児期の自己制御機能の発達 (2) —親子関係と幼稚園での子どもの特徴— 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, **10**, 117-128.
- 森下正康 (2001). 幼児期の自己制御機能の発達 (3) —父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか— 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, **11**, 87-100.
- 森下正康 (2003). 幼児の自己制御機能の発達研究 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, **13**, 47-56.
- 森下正康・藤田のゆり (2012a). 食卓の雰囲気と母親の言葉かけの特徴が児童の偏食におよぼす影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **8**, 117-125.
- 森下正康・藤田のゆり (2012b). 母親の言葉かけの特徴と食卓の雰囲気が児童の自尊感情と他者受容におよぼす影響 発達教育学研究, **6**, 31-41.
- 森下正康・藤村あずさ (2013). 小学生の頃からの言葉かけが女子大学生の自己制御機能の発達に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **9**, 125-134.
- 森下正康・松山紗也 (2014). 中学・高校時代の母親の言葉かけが女子大学生の母子関係に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **10**, 103-112.
- 無藤 隆・麻生 武 (2004). 保育ライブラリ子どもを知る教育心理学 北大路書房.
- 末田啓二・庄司留美子・森下正康 (1985). 母子相互の対応様式の分析—質問紙法により母子の対応連鎖の特徴— 和歌山信愛女学短期大学信愛紀要, **25**, 31-38.
- 鈴木真雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 (1985). 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告, **34** (教育科学編) 139-152.
- 豊田秀樹 (2007). 共分散構造分析 [Amos編] 東京書籍.
- 豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治 (2005). 日本版 ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発 奈良教育大学紀, **54**, 43-47.
- 豊田弘司・山本晃輔 (2011). 日本版 WLEIS (Wong and Law Emotional Intelligence Scale) の作成 奈良教育大学教育実践開発研究センター紀要, **20**, 7-12.
- 辻岡美延・山本吉廣 (1975). 「親子関係診断尺度 EICA」日本・心理テスト研究所.